

松山大学論集
第二十四卷第二号抜刷
平成二十四年六月発行

教育令期における小学校建築基準の形成

——『文部省示諭』「小学校ノ建築」の影響について——

川口 仁志

教育令期における小学校建築基準の形成

——『文部省示諭』『小学校ノ建築』の影響について——

川 口 仁 志

一 『文部省示諭』の「小学校ノ建築」

一八七九年（明治一二年）の教育令は、学制の中央集権的な性格を改め、教育行政上のさまざまな権限を郡や町村に大幅に委任しようとするものであった。しかし一八八〇年（明治一三年）二月二十八日に教育令は全面改正され（第二次教育令）、今度は府知事県令の権限が強化されることになる。また第二次教育令では、公立学校の設置廃止について「其府県立ニ係ルモノハ文部卿ノ認可ヲ経ヘク其町村立ニ係ルモノハ府知事県令ノ認可ヲ経ヘシ」（第二〇条）とされ、小学校などの設置廃止の規則に関しては「府知事県令之ヲ起草シテ文部卿ノ認可ヲ経ヘシ」（第二二条）と定められており、文部省の関与も強められることになった。そして浮上してきたのが、府県や文部省がどのような小学校建築の基準を示すかという問題であった。

こうしたなかで文部省は、一八八二年（明治一五年）、小学校建築の基準を公にすることになる。学事諮問会のなかで示された『文部省示諭』のなかの「小学校ノ建築」（史料②）がそれである。文部省は、この年の

一月二二日から二月一五日にかけて、全国各府県の学務課長および府県立学校長を東京に召集して、学事諮問会を開催した。そしてその席上、文部省の各局課長または主務吏員が、府県の担当すべき教育諸般の事項について、文部省の基本方針を説明した。その内容を文章化して配布した文献が『文部省示諭』である。『文部省示諭』は、第二次教育令体制についての「最も体系的かつ詳細な、文部省の公式解説」であり、その「基本原理を教育の具体的な分野や事項に即して体系的に解き明かしてくれている」史料である。そしてその内容は、「諸府県での教育行政施策のその後の展開に對し、すぐれて直接的かつ強力に影響を及ぼした」とされる。⁽²⁾

その『文部省示諭』のなかの「小学校ノ建築」は、「わが国最初の公的な学校建築基準」であり、そこに示された項目に沿って、多くの府県で小学校建築心得や小学校建築規則などが制定されるようになる。⁽³⁾たとえば校地について、通学や衛生に関する考慮をたうえで、児童一人あたり二・五坪以上にすべきとする基準を示した点、あるいは教室について、左方採光や中間色の壁色の原則を示し、一坪に四人という面積の基準を示した点など、いくつかの基準は「以後ながく学校建築の準則となるものであつた」とされる。⁽⁴⁾

一方で『文部省示諭』は、各府県で作成される規則の内容を拘束するという強制的な性格のものではなく、小学校の新築についても「府県ニ於テハ詳細ノ検査ヲ遂ケテ後之ヲ許可シ務メテ学校ノ本旨ニ適センコトヲ図ルヘシ」と述べ、府県がそれぞれの基準を設けて検査を実施することを促していた。それでは各府県は、『文部省示諭』の「小学校ノ建築」から、どのような影響をどの程度受けたのであろうか。本稿は、一八八三年（明治一六年）から一八八五年（明治一八年）のあいだに、いくつかの県で示された小学校建築に関する心得を検討し、『文部省示諭』の「小学校ノ建築」の影響がどのように及んだのかについて明らかにしようとするものである。

二 千葉県「小学校舎建築心得」

千葉県は一八八三年（明治一六年）、学校建築について県が示す標準としては「学制以来初めてのもの」として、「小学校舎建築心得」（史料⑤）を郡に配布した。この「心得」について、『千葉県教育百年史』は、寺院や民家を仮の校舎として利用することも多かった当時の状況のなかで、「非常に具体的で、しかも科学的な考え方」にもとづいて基準が定められていると述べ、児童数に応じた規模の施設・設備の必要性、それらの男女による区別、児童の健康管理や危険防止への配慮などが見られる点について評価している^⑤。

しかし、千葉県の「小学校舎建築心得」は、『文部省示諭』に挙げられた二二項目の基準を、そのまま掲げたものにすぎず、内容のみならず文言にいたるまで、両者はほぼ同じものである^⑥。些細な言い回しを除いては、修正された部分はなく、『文部省示諭』をそのまま流用していると言って差し支えない。『文部省示諭』が示されてまもない時期のものでもあり、千葉県が独自に検討した部分はなく、『示諭』に忠実に倣った事例であるということができる。

三 長野県「小学校舎建築心得」

一八八三年（明治一六年）五月、長野県は小学校校舎の建築手続きに関する県達のなかで、町村立小学校の校舎を建築しようとするときの伺書には「敷地ノ形状方位用水ノ位置校舎ノ間取坪数窓戸ノ所在附属建物ノ位置樹木ノ有無等ヲ詳記シ川ニ沿ヒ山ニ拠ル等ノ地景ヲモ適宜記載」した図面を添付することとした^⑦。そしてそ

れにあわせて、準拠すべき心得として、二〇項目からなる「小学校建築心得」（史料③）を論達している。

長野県の「小学校建築心得」は、『文部省示諭』の「小学校ノ建築」と、内容的にはおおむね変わらないものである。冒頭の「学校ノ校舎ニ於ケルハ猶人ノ身体ニ於ルカ如シ」から「校舎ノ構造ハ華飾ニ流レズ矮陋ニ失セズ素朴堅牢ニシテ児童ノ管理及授業ニ便ニシ氣候ヲ考ヘ衛生ヲ慮リ通風採光等亦各其宜シキニ適セサル可ラス」までの文章は、『示諭』の冒頭部分とほぼ同じである。

ただし、『文部省示諭』に掲げられた項目と長野県のそれとを比較すると、長野県が削除した部分がいくつか見られる。『示諭』は階段の幅・路面・蹴上について、それぞれ四尺以上、八寸以上、四寸ないし五寸としているが、長野県はこうした基準を示していない。『示諭』は便所について、男女別にして校舎からの距離を離すこと、児童百人につき三個以上を設置することを定めているが、長野県にはこの件に関する項目がない。机や椅子の材料について『示諭』は、「松材ノ如キハ各地得易クシテ且ツ堅質ナルモノトス」としているが、長野県はこの記述を削除している。

長野県によって修正されている点も、わずかではあるが挙げることができる。教室の収容児童数について『文部省示諭』が「三十人内外」としているのに対して「三十人以下」としている点、天井の高さについて『示諭』が「一丈二下ラサルヲ要ス」としているのに対して「九尺二下ラサルヲ要ス」としている点、教室の腰板の高さや窓の高さについて『示諭』が三尺五寸を標準としているのに対して、およそ三尺としている点などである。

また、長野県の「心得」には、『文部省示諭』に付け加えるかたちで、より詳細に記述されている部分も、いくつか見られる。教室の広さについては、『示諭』が「長サ五間ニ過キサルヲ可トス」としているだけであるのに対して、「長サ五間巾四間ヲ最広トシ長サ三間巾二間半ヲ最狭トス」というように、詳しく規定されている。『示諭』も長野県も、教室内の容積を増やすためには天井がなくてもかまわないとしているが、長野県

の場合には、それに「寒氣ノ侵入セサルヲ要ス」と付け加えている。机について長野県は「一人若クハ二人用ニ止ムルヲ良トス」と付け加えている。

このように、長野県の「小学校建築心得」は、『文部省示諭』に挙げられた内容を参照しつつ、部分的に削除し、あるいは追加、修正したものである。とはいうものの、全体としてそうした修正はわずかな部分にとどまっており、長野県の「心得」は『文部省示諭』をほぼ踏襲したものであるといえる。

四 宮城県「小学校建築心得」

千葉県や長野県の事例は、『文部省示諭』の影響を強く受けて小学校建築の基準が作成された事例であるが、『示諭』以降に県単位で作成された基準が、すべて『示諭』に倣ったものというわけではない。次に検討する宮城県の場合は、『示諭』以外からの影響を大きく受けていた事例にあたる。

一八八三年（明治一六年）七月、宮城県は二五条からなる「小学校建築心得」（史料④）を定めているが、この「心得」以降に宮城県で建築された「すぐれた学校建築はこの規程に負うところが多い」とされる。⁽⁸⁾「質素」かつ「堅牢」で、保健衛生に配慮した学校建築を目指すという基本的な考え方については『文部省示諭』と同じであるが、その条文を見てみると、『示諭』の影響を受けたというよりもむしろ、愛媛県が通達した「小学校建築心得」を参考にしたことがわかる。

『文部省示諭』が示されるよりも早い一八八二年（明治一五年）三月、愛媛県は「小学校建築心得」（史料①）を定めている。愛媛県では第二次教育令を受けて「明治一五年時に小学校関係の諸規則を次々と布達して、県内小学校教育の画一化を進め」⁽⁹⁾ていたが、「小学校建築心得」を作成して校舎についての基準を示そうとした

のもその一環である。この「心得」は全体で二六条からなり、それまでに他の府県によって作成されてきた小学校建築基準を取り入れながら作られたものであると考えられる。特徴的なのは、校舎の形の例として、一字形・丁字形・十字形・工字形・回字形・凸字形・凹字形の七種類をあげ、一字形・工字形・回字形・凹字形の四種類を「最良」としている点である。これら七種類の校舎は平面図としても示され、さらには、一字形校舎の「平屋外貌」、「生徒百六十八人」収容の一字形校舎の「内場」、凹字形校舎平屋（三百七十八人収容）、回字形校舎（三百三十六人収容）、校地全体を示した校舎（百二十六人収容）についても図示されている。

宮城県「小学校建築心得」は、その多くの部分が愛媛県の「小学校建築心得」と文面に至るまで同じであり、愛媛県を参照したことは明らかである。愛媛県の「心得」は二十六条あるが、そのほとんどの条文が、宮城県の「心得」に引き継がれているのである。

両者を詳細に比較してみても、愛媛県の基準を宮城県がそのまま採用している部分がいくつも見られる。校地面積については、学区の学齢児童百人に対して二五〇坪以上であること、児童が百人増えるごとに百坪を増やすこと、児童が少ない場合でも最低一五〇坪とすることといった基準の設定は、両県に共通している（愛媛県第一条第三項、宮城県第六条）。天井の高さを八尺以上としている点（愛媛県第一〇条、宮城県第八条）、教室の窓について幅四尺ないし五尺、高さ五尺ないし六尺としている点（愛媛県第十七条、宮城県第十五条）、教室の外に設ける「縁側」の幅を四尺ないし六尺としている点（愛媛県第五条、宮城県第十三条）、階段の幅を四尺以上としている点（愛媛県第二一条、宮城県第二一条）、生徒控所の広さを教室面積の三分の一以上としている点（愛媛県第七条、宮城県第一八条）なども、宮城県と愛媛県は共通している。

一方、愛媛県の基準に宮城県が修正を加えたと思われる部分もいくつか見られる。校舎の収容人数について、愛媛県が学区内の学齢児童百人に対して八〇人以上としている（第三条）のに対し、宮城県は九〇人以上とし

ている(第七條)。教室の広さについては、愛媛県は三間半×四間の教室に四十二名を収容するとしている(第四條)が、宮城県はそれより狭い三間×四間の教室に最大三十名を収容するとしている(第二二條)。窓については、愛媛県が左右に三カ所ずつ設けるべきであるとしている(第一七條)のに対し、宮城県は「適宜左右二設クヘシ」とだけしか規定していない(第一五條)。このように宮城県は、県内の小学校の実態をふまえてのことであろうが、愛媛県の定めた基準を修正しているのである。

注目すべきは、宮城県の「心得」の一部に『文部省示諭』を参考にしたと考えられる基準も存在することである。宮城県では、校舎内に戸長役場や町村会議所を設ける場合には、授業に支障のないように児童とは別の出入口を設けるべきであるとしており(第一一條)、同様の記述は『示諭』にも見られる。また、窓の面積について教室の平面積の六分の一以上と設定している点(第一五條)、階段について幅四尺以上、踏面八寸以上、蹴上四寸ないし五寸と詳細に規定している点(第二一條)、壁の色についてネズミ色を用いる方法もあるとしている点(第十條)、昇降口は男女を区別すべきとしている点(第二〇條)、便所は男女を区別すべきとしている点(第二二條)なども、愛媛県の「心得」では触れられていないが、『示諭』には同様の記述がある。

また、宮城県の「心得」には、机と椅子についての項目があり(第二五條)、椅子の高さを児童の脛の長さとし、椅子から机の天板までの高さを児童の身長六分の一としていて、この条文は『示諭』とはほぼ同じものであるが、愛媛県の「心得」にはそもそも机や椅子についての項目そのものがない。また、宮城県の「心得」には裁縫所についての項目があり、「礼式演習場」としても利用可能で「畳或ハ薄縁上敷ノ類」を敷いた広い部屋として規定されていて(第一七條)、裁縫教室を「礼節等」を学ぶためにも用いるとする説明は『示諭』に見られるものであるが、愛媛県の「心得」にはそうした説明はない。このように、いくつかの点で宮城県の「小

学校建築心得」には、『文部省示諭』から影響を受けたと考えられる部分が見られるのである。

おそらく宮城県では、自分たちの県の実情をふまえたうえで、『文部省示諭』よりも愛媛県の「小学校建築心得」のほうがより実態にあっていると判断して、基本的にはそれを参考にし、なおかつ、それだけでは不十分であると考えて、部分的に『文部省示諭』を取り入れたのではないだろうか。

五 島根県「小学校建築心得」

島根県は一八八四年（明治一七年）八月、「小学校建築心得」（史料⑥）を布達した。全体で二〇条からなるこの「心得」は、内容から文言にいたるまで、前年に示された宮城県の「小学校建築心得」と重複する部分が多く、大きな影響を受けているといえることができる。

宮城県と島根県の「心得」を比較すると、島根県の「心得」の記述のほうがより詳細にわたっていることがわかる。宮城県の「心得」には、平坦に整備した屋外の「遊歩場」についての記述があるだけだが（第二三条）、島根県の場合には、校舎内に設ける体操場と校舎外に設ける体操場とが区別され、前者については「最モ堅牢ニシテ牀板ヨリ塵埃ヲ飛散セサラシムヘシ」とされ、後者については「砂礫ヲ以テ平坦ニ固メ光線及温度ノ適量ナル場所タルヘシ」と説明されている（第五条第八項）。宮城県の「心得」は、窓について、床からの高さ、面積、幅と高さについての基準を定めているが（第一五条）、島根県の場合は、通常の窓と西洋風の窓とに分けて、それぞれ別の基準を定めている（第一二条）。島根県が付け加えた規定としては、教壇について、幅は教室と同じ、縦は六尺、高さは一尺五寸とする項目（第五条第四項）、土地の状況によっては床下に地下室を設け、「牀版ヲ乾カシ薪炭ヲ貯ヘ「ストーフ」又ハ火焼所等ヲ置クニ便ナラシムル」とする項目（第一六条）、

資金に余裕がある場合に「丘陵谿谷森林草庭」を設けるとする項目（第十九条）などが挙げられる。

また、島根県の「小学校建築心得」には、愛媛県の「心得」を取り入れたと思われる箇所もある。宮城県県の「心得」が愛媛県から大きな影響を受けているので、島根県と愛媛県の「心得」が似ているのは当然であるが、島根県が、あえて宮城県ではなく愛媛県の示した基準を採用したと思われる部分が見られるのである。校舎の収容人数を学齢児童百人につき八〇人としている点（愛媛県第三条、島根県第六条）、教室面積を三間半×四間としている点（愛媛県第四条、島根県第五条第一項）などは、宮城県の「心得」に示された基準ではなく、愛媛県の基準が採用されている。島根県は校地に適さない土地についての事例を一一項目挙げているが（第四条第六項第七項）、このなかには愛媛県が挙げている四項目（第一条第五項）が含まれており、こうした項目は宮城県の「心得」には見られない。

さらに、島根県の「心得」には、『文部省示論』を参考にしたと考えられる部分も見られる。教室の天井の高さについて、愛媛県や宮城県は八尺以上としている（愛媛県第一〇条、宮城県第八条）が、島根県は一丈以上と定め、「暴風大雪ノ虞アル地方」に限っては八尺以上としたうえで、そうした基準を満たすのが難しい場合には天井を設けないという方法を提案している（第九条）。天井の高さを一丈以上とし、天井を設けない方法を示しているのは、『示論』と共通する説明である。また、便所の数を児童百人あたり概ね三個以上としている点（第五条第一二項）、校舎の近くか校舎内に教員の寄宿所を設けることが便利であるとしている点（第五条）などは、愛媛県や宮城県には見られないが、『示論』に見られる基準である。

このように島根県は、「小学校建築心得」を作成するに当たり、基本的には宮城県の「小学校建築心得」を踏襲しつつ、必要に応じて愛媛県の示した基準や『示論』の基準も部分的に参考に行っているのである。

六 佐賀県「小学校建築心得」

佐賀県は一八八五年（明治一八年）三月に「小学校建築心得」（史料⑦）を通達し、郡役所および戸長役場に対して、小学校建築の概略を示した。「小学校建築心得」は、乙号県達として示されたことから「一定の拘束性」をもつものとされ、それ以降「小学校を新築する時ははこの基準に則して、児童生徒の左側に窓をもった大体は東あるいは南向きの長方形の、規格的なそして質素堅牢な教室・校舎が建設される」ようになったという。⁽¹⁰⁾

佐賀県の「小学校建築心得」は一二の項目からなるが、そのいずれの項目も『文部省示諭』に見られるものである。『示諭』が示したのが二三項目であるから、そのうちの半分強ほどを佐賀県が採用したということになる。佐賀県が採用しなかったのは、敷地の広さや方位、校舎の増築、机や椅子や黒板に関する項目などである。また、窓の面積や向きについての項目は採用するが、その高さについての項目は採用しない、便所の位置についての項目は採用するが、その個数についての基準は採用しない、といった取捨選択もおこなわれている。

また、佐賀県の「心得」は、階段について、蹴上の基準（四寸ないし五寸）は採用するが、幅（四尺以上）や踏面（八寸以上）や個数（二箇所）の基準は採用していない。児童の出入口については、その位置についての基準は採用しているが、『文部省示諭』が設置すべきとしている「履物傘置台」には触れていない。校舎内に設けられる部屋として、「教場」「教員詰所」「湯吞所」「講堂」「食堂」などについて挙げているが、『示諭』が取り上げている「教員ノ住家」についての記述は、佐賀県には見られない。

このように、『文部省示諭』に示された内容を取捨選択することによって、佐賀県の「小学校建築心得」は

作成された。おそらく佐賀県としては、『示諭』の示した基準を吟味するなかで、不要であると考えられるもの、あるいは現実に照らして実現しにくいと考えられるものを削り、必要なものだけを採用したのである。

七 地方による『文部省示諭』の受容

以上、『文部省示諭』が示されてから三年のあいだに五つの県で作成された小学校建築の基準について、検討を加えてきた。史料の入手できた限られた範囲の県についての考察ではあるが、『文部省示諭』が多くの県の小学校建築の基準に影響を及ぼしたであろうことは、十分に推察できる。そしてまた、その影響の態様が県ごとに異なっていたということも明らかになった。たとえば、『文部省示諭』よりも愛媛県の「小学校建築心得」から強い影響を受けたという事例も存在したのである。⁽¹⁾『文部省示諭』の「小学校ノ建築」は、一定の影響をもつて広がっていったが、必ずしも『示諭』だけが独占的な影響力をもっていたのではなく、各県ごとの裁量によって、他県が示した基準も比較的自由に参照されたのである。

とはいえ、『文部省示諭』によって示された小学校建築に関する基本的な原理が、地方に浸透していったことは確かである。その原理の一つは、将来にわたって就学児童数が増加していくことを織り込んだうえで、適正な規模の学校施設を整備しなければならないという考え方である。『示諭』においては、校地は児童一人に対して二坪半、教室は児童一人につき三尺平方（一坪に四人）、などの基準が示されたが、それらは地方にも広く受け入れられていった。一八八一年（明治一四年）一月の就学督責規則起草心得（文部省達第三号）の制定を契機として、地方も就学督策を強化していくことになるが、その結果として増加することになるであろう児童数を支える基盤整備のために、学校施設の収容力に関する基準を示すことは、地方にとっても不可欠の

準備だったのである。

また『文部省示諭』は、児童の安全や健康への配慮という原理を強く打ち出したものであった。そうした立場から、『示諭』においては、階段の寸法、窓の位置や大きさ、机や椅子の高さなどについて、具体的な基準が定められた。それぞれの県は、それらの基準すべてを採用したわけではないにせよ、基本的には安全や健康を重視するという考え方にもとづいて、小学校建築の基準を定めていった。学制発布から十年あまりの期間を経て、児童の安全面や保健面の環境についての理解も一定程度進んでいたということができるだろう。

『文部省示諭』の示した原理のなかでも重要なものとして、のちに「質朴堅牢」主義といわれるようになる立場がある。『示諭』は当時の小学校建築の状況について「一ハ華飾ヲ旨トシテ堅牢ヲ顧ミス一ハ醜陋ニ流レテ衛生ヲ慮ラス」と述べ、「蓋シ校舎ノ構造ハ成ルヘク素朴堅牢ヲ旨トス」べきであると主張した。各県は、この考え方を取り入れ、「質朴堅牢」主義は次第に定着していくことになる。

ちなみに『文部省示諭』に示された諸原理は、各県の小学校建築に関する心得を通じてだけではなく、たとえば小学校教員向けの書物によっても、その影響を広げていった。一八八五年（明治一八年）の『小学教員必携』には「校舎ノ建築」と題する次のような記述がある。「学校敷地ノ撰択屋舎ノ建築ハ児童ノ管理授業ノ便否衛生ノ利害ニ関係スルコト鮮少ナラス故ニ教師タルモノ建築ノ事業ハ学務委員ノ協議ニ参与シ深く将来ヲ量リ決シテ軽々ニ看過ス可ラス夫レ一旦建築ノ後ハ容易ニ変換スルヲ得サルモノナレハ宜シク其着手ノ初メニ於テ精密ニ注意シ之ヲ孟浪ニ付ス可ラス然ラサレハ不経済ヲ来スノミナラス言フ可ラサルノ弊害ヲ生ズ可シ是故ニ敷地ハ主トシテ通学ノ便否日光ノ向背衛生諸般ノ情況ヲ考ヘ校舎ノ構造ハ質素堅牢ニシテ児童ノ教導管理ニ便ニシ且通風採光採温等亦各其实用ニ適スルヲ旨要トセサル可ラス然ルニ世間往々学校建築ノ旨趣ヲ誤リ或ハ官衙ニ擬シテ之ヲ建テ或ハ寺院ニ摸シ或ハ劇場ニ類シ惟ニ華飾ニ陥リ堅牢ヲ顧ミサルモノアリ」⁽¹²⁾。『示諭』の前

文の一部とはほぼ同じ内容であるが、小学校教員はこうした手引書からも、『文部省示諭』に示された学校建築観を学んでいたのである。

これまで見てきたように、とくに第二次教育令期は、文部省や各県によって積極的に小学校建築の基準が提示された時期であった。しかし、財政緊縮政策による経済不況や、地方農村の財政窮乏を背景に、施設基準の制定はやがて停滞を余儀なくされることになる。そして、一八八五年（明治一八年）八月一二日の教育令再改正により（第三次教育令）、小学校とは別に、「授業料をおさめることができない貧家の子弟に普通教育をさずける場所」¹³として「小学教場」を設置することが認められる。小学教場は「寺子屋風のものにまで後退」¹⁴した施設であったともいわれ、当時の文部省は「校舎ハ必スシモ別ニ設ケス杜寺ノ廡下若クハ民家ノ一隅等ヲ以テ充用シ従来ノ家塾様ノ体裁ニテモ妨ケナキモノ」¹⁵であると説明している。この制度と巡回授業による方法とをあわせて実施することによって、教育費が節約でき、資力に乏しい地域においても義務教育普及の責任が果たせると考えられたのである。

このように第三次教育令は、第二次教育令における積極的教育振興策を後退させ、地方の教育費削減を図ろうとするものであった。第三次教育令の施行された期間は短く、一八八六年（明治一九年）には新たに小学校令が制定されるが、学校施設の整備についての消極的な姿勢は、そのまま受け継がれていくことになる。小学校令以降における小学校建築の基準がどのようなものになっていったかについては、今後の研究課題としてのい。

注

- (1) 佐藤秀夫『教育の文化史3 史実の検証』阿吽社、二〇〇五年、二六三―二六四頁。初出は「一 解題―一八八二（明治

十五) 年の学事諮問会と『文部省示諭』とに関する研究」国立教育研究所第一研究部教育史料調査室編『学事諮問会と文部省示諭 教育史料1』国立教育研究所、一九七九年。

(2) 同右書、三一一頁。

(3) 同右書、二九〇頁。

(4) 佐藤秀夫『教育の文化史2 学校の文化』阿吽社、二〇〇五年、一五五―一五六頁。初出は『学校文化の起源3 校舎と教室の歴史』『月刊百科』第一九三号、平凡社、一九七八年一〇月。

(5) 千葉県教育委員会・千葉県教育百年史編さん委員会編著『千葉県教育百年史 第一巻 通史編(明治)』(復刻版) 一九七八年、三五八―三六二頁。なお、第一巻の通史編(明治)では、この「心得」は「明治十六年四月」に各郡に配布されたと述べられているが、同じ『千葉県教育百年史』の第三巻の史料編(明治)には、「印旛下地生南相馬郡」に「明治十六年十月六日」の日付で配布されたと記されている。また、通史編では「小学校建築心得」、史料編では「小学校舎建築心得」となっている。

(6) 佐藤秀夫も、千葉県の「小学校舎建築心得」は『文部省示諭』と「全く同文であった」としている。国立教育研究所編『日本近代教育百年史 第三巻 学校教育1』国立教育研究所、一九七四年、一一〇七頁。

(7) 乙第七五号(長野県教育史料行会編『長野県教育史 第十巻 史料編四』長野県教育史料行会、一九七五年、二四七―二四八頁。)

(8) 宮城県教育委員会企画編集『宮城県教育百年史 第一巻 明治編』ぎょうせい、一九七六年、二三〇頁。

(9) 愛媛県史編さん委員会編『愛媛県史 近代 上』愛媛県、一九八六年、三二二頁。

(10) 佐賀県教育史編さん委員会編『佐賀県教育史 第四巻 通史編(一)』佐賀県教育委員会、一九九一年、四七五頁。

(11) 愛媛県の「小学校建築心得」が『文部省日誌』に掲載され、広く知られていたことが、その一因となっているのかもしれない(『文部省日誌』明治一五年第四二二号、一三―一八頁)。

(12) 蘆谷重教『小学教員必携』集英堂、一八八五年、七―八頁(上沼八郎監修『明治・大正「教師論」文献集成 第六巻(小学教員必携・小学教員心得)』ゆまに書房、一九九〇年、所収)。

(13) 倉沢剛『小学校の歴史Ⅱ―小学校政策の模索過程と確立過程』ジャパンライブラリービューロー、日本放送出版協会、一九六五年(一九八九年復刊)、三三六頁。

(14) 前掲『日本近代教育百年史 第三巻 学校教育1』九七三頁。

(15) 文部省『学制百年史(記述編)』一九七二年、一七七頁。同右書、九七三頁。

付記 本稿は、松山大学国内研究制度により、平成二二年から平成二三年にかけて研修を実施した際の研究成果の一部である。

史料

【史料①】小学校建築心得

甲第八十七号

小学校建築心得左之通相定候条、此段布達候事、

但自今建築伺出候節ハ学校地ノ反別建築ノ種別其経費ノ額学
齡人員及就学生徒数ヲ記シ、校舍ノ図面ハ方位及其建坪并内
部ノ各建坪ヲ区分シ、且其位置ハ学区ノ東西南北ノ極端ヨリ
凡ソ何町何間ニ当ル等詳細具状可致事、

明治十五年三月二十八日

愛媛県令 関 新平

小学校建築心得

第一条 小学校ヲ建築セント欲セハ先ツ其地所ヲトセサルヘカ
ラス、今其大略ヲ示ス左ノ如シ、

第一項 学校建築ノ地所ハ学区内ノ中央ニシテ生徒通学ニ不
便ナキ場所タルヘシ、

第二項 学校地所ハ成ルヘク土地高燥ニシテ風光ニ富メル所
ヲ撰定スヘシ、

但方位ハ南ニ面シ、北方ニ樹林又ハ山岳等アルヲ最良ト
ス

第三項 学校地所ノ広袤ハ学齡百人アル学区ニ於テハ少クモ
二百五十坪以上タルヘク、百人毎二百坪ヲ増スモノトス、

教育令期における小学校建築基準の形成

但学齡僅カ四五十人ナルモノハ二百五十坪以下ナルモ妨
ケナシト雖トモ百五十坪ヨリ少ナカルヘカラス、

第四項 建坪地形ハ可及的高キヲ要シ地面ヲ距ルコト二尺ヨ
リ卑フスヘカラス、

第五項 凡ソ左ノ地所ハ校地ニ用ユヘカラス、

一 卑湿ナル地所

一 太陽光線ヲ受クル充分ナラサル地所、

一 近傍ニ汚濁ノ池水等アル地所

一 熱鬧ナル街衢市場演劇場水車若クハ諸器械製造所等ニ
近接セル地所

第二条 小学校ハ教場裁縫所教員詰所生徒控所及遊園ヲ具備シ
之ニ応接所書室小使詰所等ヲ加フルヲ良トス、

第三条 校舍ノ広狭ハ学区内学齡児童ノ多寡ニ応シ構造スヘ
シ、例セハ学齡百人アル学区ニ於テハ少クトモ八十人以上ノ

生徒ヲ容ルヘキ校舍ヲ造営スルモノトス、余ハ此比例ニ準ス
ヘシ、

第四条 教場ハ長方形ヲ最良トス、其広狭モ亦生徒ノ多少ニ関
スト雖トモ各級ニ一教場ヲ附与スル場合ニ於テハ幅三間半長
四間ノ教場トナシ、其中二十四二人ヲ容ル、ヲ適當トス、

但少数ノ教員ニシテ多数ノ生徒ヲ教授スヘキ学校ニ在リテハ其教場狭少ナランヨリ寧ロ広大ナルヲ便利トス、

第五条 数教場ヲ設クル学校ニ在リテハ教場外ニ幅四尺乃至六尺ノ縁側ヲ附シ生徒ヲシテ教場内ヲ通過セシムヘカラス、

第六条 教員詰所ノ位置ハ生徒監督ニ便ナル所ヲ撰定スヘシ、

但村落学校ニ在リテハ詰所ヲ教員ノ寄寓所トナシ爨炊場等ヲ具備スヘシ、

第七条 生徒控所ハ可成男女ヲ區別シ其広サ教場ノ面積三分ノ一ヨリ狭カラサルヲ要ス、

第八条 校舍築造ノ形ハ一字形丁字形十字形工字形回字形凸凹字形等種々アリト雖トモ一字形工字形回字形凹字形ヲ最良トス、

第九条 校舍ノ方位ハ地形ト恒風ノ都合ニ因ルヘシト雖トモ南二面スルヲ最良トシ北面ニ構フルヲ不可トス、

第十条 校舍建築ノ種別ハ木造石造煉瓦造及平屋二階造等ノ數種アリトス、

但平屋ニ構造スルヲ最良トス、然レトモ土地狹隘ナルトキハ二階又ハ三階ニ當ムコトアルヘシト雖トモ教場天井ノ高サハ都テ床ヲ距ルコト八尺ヨリ卑フスヘカラス、

第十一条 校舍ノ建築ハ質素ニシテ堅固ナルヲ旨トシ、決シテ虚飾ニ流レ実用ニ負クヘカラス、

第十二条 凡ソ校舍ヲ經始スルニ当初些少ノ經費ヲ嫌厭シテ之ヲ粗雑ニ付ストキハ永久ニ耐ユル能ハサルノミナラス年々其修補等ノ為メ却テ利アラサルモノナリ、故ニ可成的良好ノ材料ヲ用ヒ完全ナル構造ヲ要スヘシ、

第十三条 適當ノ校舍ヲ築造セント欲スルモ資金匱乏ナルカ為メ其見込ヲ全フスルコト能ハサルトキハ他日之カ副業ヲナストモ不都合ナキ様最初ニ於テ經營スヘシ、

第十四条 校舍ヲ經始スルニハ光線ノ適度空氣ノ流通温度ノ適量等ニ注意セサルヘカラス、

第十五条 校舍ハ風雨嚴寒ノ害ヲ防御センカ為メ其屋根ヲ瓦葺ニシ其周辺ノ内外ハ壁ニテ作り、又ハ板ニテ囲ヒ其窓ハ成ルヘク玻璃ヲ用ユルヲ最良トス、

第十六条 校舍ノ内外トモ壁ヲ用ユレハ光線ヲ反射シテ室内ヲ明ニスルノ益アリトス、然レトモ南窓アル教場ノ如キハ其反射度ニ過クルヲ以テ窓裏ニ淡青色等ノ窓掛ヲ裝置シ常ニ光量ヲ加減スルヲ要ス、

第十七条 教場ノ窓ハ可成の大且高クシテ充分ニ光線ヲ取り且新氣流通ニ便スヘシ、即第四条ノ如キ教場ナレハ窓ハ幅四尺乃至五尺高五尺乃至六尺ノモノヲ三箇ツ、左右ニ設ケ前後ニ附スヘカラス、

但教場ノ右カ左カニ障害アリテ兩旁ニ窓ヲ開クコト能ハサルトキハ生徒ノ左方ニ窓數ヲ増スモ又ハ窓ヲ屋上ニ穿ツトモ妨ケナシ、

第十八条 教場ノ仕切ハ壁ニテ作り隣室ノ咄語ヲ遮断スルヲ要ス、然レトモ試験等ノ為メ兩三ノ教場ヲ開通シ全生徒ヲ集合セント欲スルトキハ板戸ヲ以テ仕切ヲナスヘシ、

但村落学校ニ在リテ生徒ノ寡少ナルモノハ每場仕切ヲ設ケサルモ妨ケナシ、

第十九条 生徒控所ニハ各所ニ戸棚ヲ設ケ帽及行廚等ヲ納ルル

ノ用ニ供スヘシ、且生徒食事ノ為メニ其四方ノ壁間ニ横木ヲ施シ之ニ幅広キ板ノ一辺ヲ蝶番ニテ付置キ平常ハ下方ニ懸垂シ食事ノ時ニ至リ肘木ヲ操出シテ棚トナシ其上ニテ食事ヲナサシムヘシ、

但生徒控所ヲ設ケ難キ学校ニ在テハ帽掛等ヲ教場ノ外壁ニ設ケ食棚ハ本文ノ如ク教場ノ四方ニ設クルモ妨ケナシ、

第二十条 生徒昇降口ハ専ラ出入ニ便ナル様ニ設クヘク且其両側等適宜ノ所ニ下足場傘台等ヲ設ケ置クヘシ、

第二十一条 二階又ハ三階ニ構造セル学校ニ在リテハ其階子ノ幅狭キハ昇降ニ利アラサルヲ以テ四尺以上ニ造ルヘク、且其高度ヲ平緩ニシテ両側ニハ必ラス欄ヲ設クヘシ、

但階子ハ椽側ニ設クルハ可ナリ、決シテ教場内ニハ附スヘカラス、

第二十二条 便所ハ成ルヘク校舍ヲ離レテ之ヲ設ケ臭氣ヲ避ケサルヘカラス、北方樹陰アル位置ニ設クルハ最可ナリ、

但其構造ハ木板ヲ用ヒス聖壁ヲ用ヒテ清潔ナラシメ、且其掃洒ニ便ナラシムヘシ、

第二十三条 学校敷地ノ周囲ニハ牆塀若クハ棚ヲ設ケ其構内ヲ遊園トナシ生徒ヲシテ是ヨリ外ニ出テシメサルヲ要ス、

第二十四条 遊園ハ生徒ノ心身ヲ快楽ナラシムル所ナレハ乾燥広闊ナルヲ最良トス、故ニ礫砂利ヲ布キテ充分平坦ニ固メ其周辺ニハ種々ノ草木ヲ植ユルヲ要ス、

但遊園モ亦男女ヲ区別スルヲ要ス、

第二十五条 遊園ニ接シテ沼池又ハ溝渠等危険ノ場所アレハ堅固ナル牆垣等ヲ設ケ其危害ヲ防セカサルヘカラス、

第二十六条 遊園内巖石或ハ樹根等掘起シテ兒童ノ跳奔ニ危険ノ患アルモノハ適宜ノ方法ヲ以テ之ヲ防セカサルヘカラス、

附録

校舍諸形

〔図は省略〕

〔出典…愛媛県史編さん委員会編『愛媛県史 資料編 近代2』愛媛県、一九八四年、一七〇～一七三頁。〕

【史料②】『文部省示諭』明治十五年

小学校ノ建築

学校ノ校舍ニ於ケルハ猶ホ人ノ身体ニ於ケルカコトシ学校ヲ設置セント欲スレハ先ツ適応ノ校舍ナカルヘカラス若シ校舍ヲ建築セントスルニハ其敷地ヲ択ハサルヘカラス而シテ敷地ノ撰択校舍ノ建築ハ兒童ノ管理授業ノ便否ニ関スルコト鮮少ナラス又一旦建築ノ後ハ容易ニ変換スヘカラサルモノナレハ宜シク其着手ノ初ニ於テ精密ニ注意ヲ加ヘサルヘカラス蓋シ校舍ノ構造ハ成ルヘク素朴堅牢ヲ旨トス兒童ノ管理及授業ニ便ニシ氣候ヲ考ヘ衛生ヲ慮リ通風採光等亦各、其宜ニ適セサルヘカラス然ルニ世間未タ学校ノ建築法ヲ知ルモノ少キヲ以テ従来各地方ニ建築スル所ノ校舍ヲ見ルニ通邑都會ニ在テハ官庁ニ擬シテ之ヲ建ツルモノアリ或ハ兵營ニ擬スルモノアリ村落僻陋ニ在テハ寺院ニ擬シテ之ヲ設クルモノアリ或ハ劇場ニ擬スルモノアリ一ハ華飾

ヲ旨トシテ堅牢ヲ顧ミス一ハ醜陋ニ流レテ衛生ヲ慮ラス而シテ学校ノ本旨ニ適セサルモノ多シ将来新タニ小学校ヲ建築セントスルモノ宜シク深く注意シテ之ヲ計画セサルヘカラス又府県ニ於テハ詳細ノ検査ヲ逐ケテ後之ヲ許可シ務メテ学校ノ本旨ニ適センコトヲ図ルヘシ依テ左ニ学校建築ノ概要ヲ示サントス

一 小学校ノ敷地ハ学区内児童ノ通学ニ便ニシテ空氣ノ流通好ク太陽ノ光線ヲ十分ニ受ケ而シテ喧雜不潔危険ノ場所及卑湿ノ土地ヲ避クルヲ要ス

一 敷地ノ広袤ハ現ニ就学スル児童ハ勿論将来就学スヘキ児童ノ数ニ応シ校舍其他体操場遊戲場等ヲ設クルニ足ルヲ要ス而シテ其地形ハ長方形ニシテ児童一人ニ二坪半ヲ下ラサルヲ可トス

但シ児童百人ニ充タサル所ノ敷地ハ本文ノ比例ヨリ広キヲ要ス

一 敷地ノ方位ハ各地ノ氣候及衛生上ニ注意シテ定ムヘシト雖モ大概東南若シクハ南方ニ面スルヲ可トス

一 校舍ハ教場(女子高等ノ教場ヲ要ス) 教員詰所湯浴所便所等ヲ具フヘク又講堂食堂等ヲ備フルハ最モ便アリトス而シテ其構造ハ素朴ニシテ堅牢ナルヘシ

但シ土地ノ情況ニ依リ戸長役場或ハ町村会議場ヲ校舍内ニ設クルトキハ成ルヘク之ヲ階上ニ置キ又其出入口ヲ別ニスヘシ且ツ小学校ノ如キハ教員ノ住家ヲ校舍ノ近傍若シクハ校舍内ニ設クルヲ便ナリトス

一 校舍ノ広狭ハ児童ノ多寡ニ応シ且ツ成ルヘク将来就学スヘキ児童ノ数ヲモ予算シテ結構スヘシ

但シ他日増築スヘキ目的アル校舍ハ予メ其計画ヲナスヲ必要ナリトス

一 敷地ノ広袤十分ナル学校ニ在テハ其校舍ハ平屋ニ構造スルヲ便ナリトス敷地狹隘ナルトキハ二階ヲ設クルコトアルヘシト雖モ幼年ノ児童及女子ノ教場ハ成ルヘク階下ニ設クルヲ可トス

一 教場(概テ分テル学校以下同シ)ニ入ルヘキ児童ノ数ハ凡ソ六十人ヲ最多

数トス而シテ授業并ニ管理上ニ便ナルモノハ三十人内外トス一教場ノ平面積ハ一人ノ児童ニ付三尺平方ニ下ラス天井ノ高サハ一丈二下ラサルヲ要ス

但シ天井ノ高サ本文ノ如クナシ難キトキハ教場内空氣ノ容積ヲ増サンカ為メ屋根裏ニ階裏ヲ露ハシ別ニ天井ヲ設ケサルモ可ナリ

一 教場ハ長方形ナルモノヲ便ナリトス

但シ其長サ五間ニ過キサルヲ可トス

一 児童ノ出入口ハ男女ヲ別ニシ且ツ其位置ハ恒風ノ向キヲ避クヘシ又入口内ノ兩側等適宜ノ所ニ児童ノ履物傘置台ヲ設クルヲ要ス

一 教場ノ壁ハ厚クシテ堅質ナルモノヲ用ヒ又牀面ヨリ三尺五寸許ノ所マテ腰板ヲ附スルヲ可トス且ツ壁色ハ日光ノ射入スル教場ニハ鼠色等反照ノ少ナキモノヲ用フルヲ緊要ナリトス

一 教場ハ児童ノ左方ニ窓ヲ設ケ光ヲ採ルヲ便ナリトス而シテ窓ノ面積ハ教場ノ平面積ノ六分ノ一以上タルヲ要ス又窓ノ位置ハ採光ノ便ヨリ論スルトキハ北方ハ光量ノ明暗ナクシテ可ナリト雖モ室内ヲ快爽ナラシメ温暖ヲ日光ニ藉ルノ便ニ於テハ

東南又ハ南方ニ之ヲ設クルヲ可ナリトス又都テ日光ノ射入スル窓ニハ教場ノ光量ヲ加減スル為メ適宜其設ヲ為スヘシ

但シ本文ノ如ク窓ヲ児童ノ左方ニ設クルコト能ハサルノ場合ニ於テモ児童又ハ教師ノ前面ニ之ヲ設ケスシテ児童ノ右方ニ設クヘシ又夏季炎熱ノ土地ニ於テハ窓ヲ児童ノ左右ニ設ケ主トシテ其左方ヨリ採光スルヲ可トス

一窓ハ牀面ヲ距ル凡三尺五寸ノ所ヨリ天井下ニ達シ且ツ其位置ハ教場ノ全面ヲ照ラシ得ヘキ所ヲ撰ヒ其構造ハ単簡ニシテ開閉ニ便ナルモノヲ可トス

一階梯ハ多数ノ児童ヲ容ル、學校ニ於テハ便宜ノ場ニ二箇所ヲ設ケ且ツ昇降シ易キヲ要ス故ニ直行或ハ彎曲ナラス半折シテ喰違状ニ為シ又欄干ヲ設クルヲ可トス

一階梯ノ横幅ハ四尺以上ニシテ其豎幅ハ八寸ニ下ラス各段ノ高サハ四寸乃至五寸タルヘシ

一便所ヲ設クルニハ管理上便ナル所ニシテ校舎ヲ離レ且ツ北方樹林アルカ如キ地ヲ撰フヘシ又通風ヲ好クシ臭氣ノ鬱滞ヲ防クヘシ又校舎ヨリ便所マテノ通路ハ庇アル廊下ヲ設クルヲ必要ナリトス

但シ西南等ニ方テ便所ヲ設クルトキハ其近傍ニ常緑樹ヲ栽エ日光ヲ遮リ臭氣ノ飛散ヲ防クヘシ

一便所ハ固ヨリ男女ヲ別ニシ其互ニ相距ルコト遠キヲ可トス又便所ノ數ハ生徒百人ニ付大約三箇以上ヲ設クヘシ

一体操場及遊戲場モ亦男女ノ区域ヲ別ニシ且砂等ヲ敷キ平坦ニシテ且ツ乾燥ナラシムヘシ

一遊戲場中夏季日光ノ烈シキ所ニハ落葉樹ヲ植エ且ツ場中或ハ

其近傍ニ危險ノ場所アレハ堅固ナル牆垣ヲ設クヘシ

一學校用卓子椅子ノ高低ハ児童身体ノ長短ニ準スヘキモノニテ椅版ノ高サハ児童ノ脛ノ長サト一樣ニシテ後方ニ傾キタル椅背アルモノヲ可トス又卓子ノ高サハ椅版ノ上ヨリ児童全身六分ノ一ノ距離アルヲ良トス

一講義等ノ如キ卓子ヲ要セサル学科ヲ教フルノ教場ニハ椅子ノミヲ備フルヲ便ナリトス都テ卓子椅子ノ用材ハ堅實ナルモノヲ可トス松材ノ如キハ各地得易クシテ且ツ堅實ナルモノトス一黒板ハ石盤石ノ堅牢ニシテ久存ノ便アルニ如クモノナシト雖モ木板等ノ黒板ヲ用フルトキハ時々黒色ヲ塗抹シテ褪色セサルヲ要ス又其位置ハ教師ノ後方ニ在ルヲ便ナリトス

以上示ス所ノモノハ男女混同ノ學校ナルカ故ニ男女各別ニ設クル所ノ學校若クハ合級教授ヲ行フ所ノ學校ニ至テハ其建築方法多少異同アルヘシト雖モ前陳ノ旨趣ニ因テ之ヲ推考スレハ略、其宜ヲ得ルニ庶幾カラン爰ニ又一言スヘキコトアリ議者或ハ云ハシ此建築法ニ因ルトキハ善ハ則チ善ナリト雖モ經費ノ崇嵩ヲ如何セント是レ皮相ノ論ニシテ未タ建築ノ何者タルヲ知ラサルモノト云フヘシ此建築法ニ因ルトキハ素朴ヲ旨トスルカ故ニ華飾ノ費ヲ省キ堅牢ヲ旨トスルカ故ニ修補ノ費ヲ省ク等經濟上ニ注意スル所少ナカラス即チ従前ノ建築費ニ比照スルモ實際決シテ崇嵩スルニ至ラサルヘシ

（出典…『文部省示諭』一八八二年、一六―二五頁。国立教育研究所第一研究部教育史料調査室編『学事諮問会と文部省示諭 教育史資料1』国立教育研究所、一九七九年、所収。）

【史料③】小学校建築心得につき県論達

郡役所

学務委員

今般乙第七拾五号ヲ以町村立小学校建築ノ儀相達候ニ付テハ自今校舍建築ノトキハ土地ノ情况ヲ酌量シ大略別紙心得ニ準拠經営致候様可取計此旨論達候事

明治十六年五月十七日

長野県令大野誠代理

長野県大書記官島山重信

小学校建築心得

学校ノ校舍ニ於ケルハ猶人ノ身体ニ於ルカ如シ 学校ヲ設置セント欲スレハ先適応ノ校舍ナカルヘカラズ 校舍ヲ建築セントスルニハ其敷地ヲ択ハサル可ラス 而シテ敷地ノ撰択校舍ノ建築ハ児童ノ管理授業ノ便否ニ関スルコト鮮少ナラス 又一旦建築ノ後ハ容易ニ変換ス可ラサルモノナレハ宜ク其着手ノ始ニ於テ精密ニ注意セサル可ラス 蓋校舍ノ構造ハ華飾ニ流レス矮陋ニ失セス素朴堅牢ニシテ児童ノ管理及授業ニ便ニシ氣候ヲ考ヘ衛生ヲ慮リ通風採光等亦各其宜シキニ適セサル可ラス 故ニ将来新ニ校舍ヲ建築セントスルモノ深ク注意シテ之ヲ計画セサル可ラス 依テ其概要ヲ示スコト左ノ如シ

一 小学校ノ敷地ハ学区内児童ノ通学ニ便ニシテ空氣ノ流通好ク太陽ノ光線ヲ十分ニ受ケ而シテ喧雜不潔危険ノ場所及昇湿ノ土地ヲ避ルヲ要ス

一 敷地ノ広袤ハ現ニ就学スル児童ハ勿論将来就学スヘキ児童ノ数ニ応シ校舍其他体操場遊戲場等ヲ設クルニ足ルヲ要ス 而シテ其地形ハ長方形ニシテ児童一人ニ付二坪半ヲ下ラサルヲ可トス

但児童百人ニ充タサル所ノ敷地ハ本文ノ比例ヨリ広キヲ要ス

一 敷地ノ方位ハ各地ノ氣候及衛生上ニ注意シテ定ムヘシト雖大抵東南若シクハ南方ニ面スルヲ可トス

一 校舍ハ教場女子ノ爲ニハ後ニ設スル 教員詰所 湯呑所 便所等ヲ備フヘク又講堂食堂ヲ具フルハ最便ナリトス 而シテ其構造ハ素朴ニシテ堅牢ナルヘシ

但土地ノ状況ニヨリ戸長役場町村会議場ヲ校舍内ニ設クルトキハ成ヘク之ヲ階上ニ置キ又其出入口ヲ別ニスヘシ 且教員ノ住家ハ可成学校構内ニ設ルヲ便ナリトス

一 校舍ノ広狭ハ児童ノ多寡ニ応シ且成ヘク将来就学スヘキ児童ノ数ヲモ予算シテ結構スヘシ

但他日増築スヘキ目的アル校舍ハ予メ其計画ヲナスヲ必要ナリトス

一 敷地ノ広袤十分ナル学校ニ在ラハ其校舍ハ平屋ニ構造スルヲ便ナリトス 敷地狹隘ナルトキハ二階ヲ設クルコトアルヘシト雖幼年ノ児童及女子ノ教場ハ成ルヘク階下ニ設クルヲ可トス

一 階梯ハ多数ノ児童ヲ容ル々学校ニ於テハ便宜ノ場所ニケ所ヲ設ケ且昇降シ易キヲ要ス 故ニ直行或ハ彎回ナラス半折シテ喰違狀ニ為シ又欄干ヲ設クルヲ可トス

一 教場ニ入ル可キ児童ノ數ハ凡六十人ヲ最多數トス 而テ授業管理上ニ便ナルモノハ三十人以下トス

一 教場ノ平面積ハ一人ノ児童ニ付三尺平方ニ下ラス天井ノ高さハ九尺ニ下ラサルヲ要ス

但天井ノ高さ本文ノ如クナシ難キトキハ教場内空氣ノ容積ヲ増サンカ爲屋根裏ニ階裏ヲ露ハシ別ニ天井ヲ設ケサルモ可ナリト雖寒氣ノ侵入セサルヲ要ス

一 教場ハ長方形ナルモノヲ便ナリトス 其長さ五間巾四間ヲ最広トシ長さ三間巾二間半ヲ最狭トス

一 児童ノ出入口ハ男女ヲ別ニシ且其位置ハ恒風ノ向ヲ避ケヘシ又入口ノ兩側等適宜ノ所ニ児童ノ履物傘置台ヲ設クルヲ要ス

一 教場ノ壁ハ厚クシテ堅實ナルモノヲ用ヒ又床面ヨリ三尺許ノ所ニテ腰版ヲ附スルヲ可トス 且壁色ハ日光ノ射入スル教場ニハ鼠色等反照ノ少ナキモノヲ用フルヲ緊要ナリトス

一 教場ハ児童ノ左方ニ窓ヲ設ケ光ヲ採ルヲ便ナリトス 而テ窓ノ面積ハ教場ノ平面積ノ六分ノ一以上タルヲ要ス 又窓ノ位置ハ採光ノ便ヨリ論スルトキハ北方ハ光量ノ明暗ナクシテ可ナリト雖室内ヲ快爽ナラシメ温暖ヲ日光ニ籍ルノ便ニ於テハ東南又ハ南方ニ之ヲ設クルヲ可ナリトス 又都テ日光ノ射入スル窓ニハ教場ノ光量ヲ加減スル爲メ適宜其設ヲナスヘシ

但本文ノ如ク窓ヲ児童ノ左方ニ設クルコト能ハサルノ場合ニ於テハ児童又ハ教師ノ前面ニ之ヲ設ケスシテ児童ノ右方ニ設ケヘシ 又夏氣炎熱ノ土地ニ於テハ窓ヲ児童ノ左右ニ設ケ主トシテ其左方ヨリ採光スルヲ可トス

一 窓ハ牀面ヲ距ル凡三尺ノ所ヨリ天井下ニ達シ且其位置ハ教場

ノ全面ヲ照シ得ヘキ所ヲ撰ミ其構造ハ單簡ニシテ開閉ニ便ナルモノヲ可トス

一 便所ヲ設クルニハ管理上便ナル所ニシテ校舎ヲ離レ且北方樹林アルカ如キ地ヲ撰ムヘシ 又通風ヲ好クシ臭氣ノ鬱滞ヲ防クヘシ 而シテ校舎ヨリ便所マテノ通路ハ庇アル廊下ヲ設クルヲ必用ナリトス

但西南等ニ方テ便所ヲ設クルトキハ其近傍ニ常緑樹ヲ栽エ日光ヲ遮リ臭氣ノ飛散ヲ防クヘシ

一 体操場及遊戲場モ亦男女ノ区域ヲ別ニシ且砂利等ヲ敷キ平坦ニシテ且乾燥ナラシムヘシ

一 遊戲場中夏氣日光ノ烈シキ所ニハ落葉樹ヲ植ヘ且場中或ハ其近傍ニ危險ノ場所アレハ堅固ナル牆垣ヲ設ケヘシ

一 学校用卓子椅子ノ高低ハ児童身体ノ長短ニ準スヘキモノニテ椅版ノ高さハ児童ノ脛ノ長サト一樣ニシテ後方ニ傾キタル椅背アルモノヲ可トス 又卓子ノ高さハ椅版ノ上ヨリ児童全身六分ノ一ノ距離アルモノニシテ一人若クハ二人用ニ止ムルヲ良トス

一 講義等ノ如キ卓子ヲ要セサル学科ヲ教フル教場ニハ椅子ノミヲ備フルヲ便ナリトス 都テ卓子椅子ノ用材ハ堅實ナルモノヲ可トス

一 黒版ハ石盤石ノ堅牢ニシテ久存ノ便アルニ如クモノナシト雖木版等ノ黒版ヲ用ルトキハ時々黒色ヲ塗抹シテ褪色セサルヲ要ス 又其位置ハ教師ノ後方ニアルヲ便ナリトス

以上示ス所ノ外土地ノ情況ニヨリ合級教授ヲ行フ所ノ学校ニ至テハ其建築方法多少異同アルヘシト雖前陳ノ旨趣ニ因テ之ヲ推

考スレハ略其宜キヲ得ルニ庶幾カラシ

〔出典…長野県教育史刊行会編『長野県教育史 第十卷 史料 編四』長野県教育史刊行会、一九七五年、二四八～二五〇頁。〕

【史料④】 小学校建築心得

乙第三十八号

明治十六年七月二十五日

小学校建築心得

第一条 学校ノ建築ハ勉メテ質素ニ基キ堅牢ヲ旨トシ虚飾ニ流レ実用ニ負クヘカラス

第二条 凡ソ校舍ヲ経始スルニ当リ些少ノ経費ヲ嫌悪シテ之ヲ粗造ニ付スルトキハ永久ニ耐ユル能ハサルノミナラス追年修補等ノ為メ却テ利アラサルモノナリ故ニ可成の良好ノ材料ヲ用キ極メテ完全堅実ナル構造ヲ要スヘシ

但適當ノ校舍ヲ築造セント欲スルモ其資金ノ匱乏ナルカ為メ一時其望ヲ達スルコト能ハサルコトアルトキハ他日之レカ副築ヲナストキ不都合ナキ様最初ニ宜シク経営スヘシ

第三条 校舍ヲ経始スルニハ光線ノ適度空氣ノ流通温度ノ適量等ニ注意スヘシ

第四条 校舍ノ位置ハ学区内ノ生徒通学ニ便ニシテ明治十五年本県甲第三十号布達学事条例第三章第三条ノ各項ニ拠リ土地高燥風光ニ富メル所ヲ撰定スヘシ

但方位ハ東南若シクハ南方ニ面シ北方ニ樹木或ハ山獄等ヲ控ヘアルヲ良トス

第五条 学校ノ地形ハ長方形ヲ良トス建築ハ地面ヲ距ル二尺ヨリ卑フスヘカラス

第六条 学校地所ノ広袤ハ学齡百人ニ付少クモ二百五十坪以上タルヘク百人毎二百坪ヲ増スモノトス

但学齡五十人ニ充タサルモノト雖モ百五十坪ヨリ少ナカル可ラス

第七条 校舍ノ広狭ハ学区内学齡児童ノ多寡ニ応シ構造スヘキモノニシテ其学齡百人アル学区ニ於テハ少クモ九十人以上ノ生徒ヲ容ルルニ足ルヲ要ス余ハ此比例ニ準スヘシ

第八条 校舍建築ノ種別ハ木造石造練瓦造及平屋二階三階等ノ数種ニシテ其形モ又一字丁字十字工字凸字凹字回字形等ノ種々アリト雖モ一字工字凹字回字形ノ平屋ヲ最良トス

但土地ノ狹隘ナルトキハ二階三階ヲ構フコトアルヘシ且天井ノ高サハ床面ヲ距ルコト八尺ヨリ卑フスヘカラス

第九条 校舍ノ屋根ハ瓦葺ヲ最良トシ其周辺ハ壁ニテ造リ又ハ板ニテ囲ミ其窓ハ成ルベク玻璃ヲ用ユヘシ

第十条 校舍ノ内外トモ壁ヲ用ユレハ光線ヲ反射シテ室内ヲ明ラカニスルノ益アリ然レトモ南窓アル教場ノ如キハ其反射度ニ過ルノ憂アルヲ以テ鼠色ノ壁ヲ用ルルカ又ハ窓裏ニ淡青色等ノ窓掛ヲ装置シ常ニ光線加減スルヲ要ス

第十一条 校舍ハ教場裁縫場教員詰所生徒控所及ヒ書籍室小使詰所等ヲ具備スルヲ良トス

但校舍内ニテ戸長役場若シクハ町村会議所ヲ設クル場合ニ

於テハ教授ニ障害ナキ場所ヲ撰ミ其出入口ヲ別ニスヘシ

第十二条 教場ハ総テ南北ニ開通シ東西ニ壁ヲ設ケ且ツ長方形ヲ良トス其広狭モ亦生徒ノ多少ニ関スト雖トモ幅三間長四間ノ教場トナシ其中ニ三十人マテ容ルルヲ適當トス

但小數ノ教員ニシテ多數ノ生徒ヲ授業スヘキ學校ニ在リテハ其教場狭少ナランヨリ寧ロ広大ナルヲ便トス

第十三条 數教場ヲ設クル學校ニ在リテハ教場外ニ幅四尺乃至六尺ノ縁側ヲ附シ生徒ヲシテ教場内ヲ通過セシム可ラス

第十四条 教場ノ区劃ニハ堅實ナル壁ヲ用キテ隣室ノ咿唔ヲ遮斷スルヲ要スト雖トモ亦タ試験等ノ為メ兩三ノ教場ヲ開通シ全生徒ノ集合ヲ要スルモノハ板戸ヲ以テ区劃スルコトモアルヘシ

但村落學校ニ在リテハ生徒寡少一人ノ教員ニテ授業スルノ場合ニ於テハ敢テ仕切ヲ設ケサルモ妨ケナシ

第十五条 教場ノ窓ハ床面ヲ距ルコト三尺乃至四尺ヲ度トシ其面積ハ教場平面積六分一以上タルヘクシテ充分ニ光線ヲ採リ且ツ空氣流通ノ便アルヲ要ス即チ第十二条ノ如キ教場ナレハ窓ノ幅四尺乃至五尺高サ五尺乃至六尺ノモノヲ適宜左右ニ設ケヘシ

但教場ノ兩側ニ窓ヲ開クコト能ハサルトキハ可成生徒ノ左方ヨリ光線ヲ射入スルヲ良トス

第十六条 教員詰所ノ位置ハ可成生徒監督ニ便ナル所ヲ撰定スヘシ

但村落學校ニ在リテハ教員ノ寄寓所トナシ爨炊場ヲ具備スルモ妨ケナシ

第十七条 裁縫所ハ可成的の廣大ニシテ畳或ハ薄縁上敷ノ類ヲ布キ兼ネテ礼式演習場トナスヘシ

第十八条 生徒控所ハ男女ヲ區別シ其広サハ教場面積三分一ヨリ狭カラサルヲ要ス即チ第十二条ノ如キ教場三箇アル學校ニテハ七坪五合ヨリ少クナカラサルノ類ニシテ余ハ此比例ニ拠ルヘシ

第十九条 生徒控所ニハ各所ニ戸棚ヲ設ケ帽及ヒ行厨等ヲ納ルルノ用ニ供スヘシ且ツ生徒食事ノ為メニ其四方ノ壁間ニ横木ヲ施シ之レニ幅広キ板ノ一片ヲ蝶番ニテ付ケ置キ平常ハ下方ニ懸垂シ食事ノ時ニ至リ肘木ヲ操シテ棚トナシ其上ニテ食事ヲ為サシムヘシ

但生徒控所ヲ設ケ難キ學校ニ在リテハ帽掛等ヲ教場ノ外壁ニ設ケ食棚ハ本文ノ如ク教場ノ四方ニ設クルモ妨ケナシ

第二十条 生徒昇降口ハ男女ヲ區別シ専ラ出入ニ便ナル様ニ設ケヘシ且ツ其兩側等適宜ノ所ニ下足場傘置台ヲ設ケ置ケヘシ

第二十一条 二階又ハ三階ニ構造セル學校ニ在リテハ其階梯ノ幅四尺以上ニシテ豎幅八寸ニ下ラス且ツ高度ハ平緩ニ各段ノ距離四寸乃至五寸ニシテ兩側ニハ欄干ヲ設ケヘシ

但階梯ハ教場内ニ設ケサル様注意スヘシ

第二十二条 便所ハ必ス男女ヲ異ニシ成ル可ク校舍ヲ離シテ之ヲ設ケ通路ニ庇アル廊下ヲ要スヘシ其方位ハ北方樹林アルカ如キ地ヲ良トス

但其構造ハ壁ヲ用キルヲ良トス且ツ其洒掃ニ便ナルカルハラス

第二十三条 遊歩場ハ乾燥広濶ナルヲ良トス故ニ砂利ヲ布キ平

但ニ固メ其周辺ニハ落葉樹並ニ種々ノ花木ヲ植ユルヲ要ス
但男女ヲ区別スヘシ

第二十四条 学校敷地ノ周辺ニハ牆壁又ハ柵ヲ設クヘシ

但敷地内ハ勿論渾ヘテ校辺ニ危険ノ場所アレハ堅固ナル牆
垣ヲ設ケサルヘカラス

第二十五条 学校用卓子椅子ノ高低ハ児童身体ノ長短ニ準スヘ
キモノニシテ椅版ノ高サハ児童ノ脛ノ長サト一様ニシテ後方
ニ傾キタル椅背アルモノヲ可トス又卓子ノ高サハ椅版ノ上ヨ
リ児童全身六分一ノ距離アルヲ良トス

(出典…宮城県教育委員会企画編集『宮城県教育百年史 第一
卷 明治編』ぎょうせい、一九七六年、一三〇—一三三頁。)

【史料⑤】小学校舎建築心得

明治十六年十月六日

印旛下埴生南相馬郡

乙第百十一号

小学校舎ノ建築ハ児童ノ管理授業ノ便否ニ関シ且一旦建築ノ後
ハ容易ニ変換スヘカラサルモノナレハ起業ノ初メニ方り精密注
意セサルヘカラス就テハ別紙小学校舎建築心得及配付候条自今
校舎建築目論見候向ハ土地ノ情況ヲ察シ可成該心得ニ依リ詳細
調査ノ上不便ノ廉無之様注意伺出候様取計フヘシ此旨相達候事

小学校舎建築心得

一 小学校ノ敷地ハ学区内児童ノ通学ニ便ニシテ空氣ノ流通好ク
大陽ノ光線ヲ十分ニ受ケ而シテ喧雜不潔危険ノ場所及卑湿ノ
土地ヲ避クルヲ要ス

一 敷地ノ広袤ハ現ニ就学スル児童ハ勿論将来就学スヘキ児童ノ
数ニ応シ校舍其他体操場遊戲場等ヲ設クルニ足ルヲ要ス而シ
テ其地形ハ長方形ニシテ児童一人二二坪半ヲ下ラサルヲ可ト
ス

但児童百人ニ充タサル所ノ敷地ハ本文ノ比例ヨリ広キヲ要
ス

一 敷地ノ方位ハ各地ノ氣候及ヒ衛生上ニ注意シ定ムヘシト雖ト
モ大概東南若クハ南方ニ面スルヲ可トス

一 校舍教場(女子ノ為ニハ後ニ設ス) 教員詰所湯吞所便所等ヲ具フヘク
又講堂食堂等ヲ備フルハ最モ便アリトス而シテ其構造ハ素朴
ニシテ堅牢ナルヲ要ス

但土地ノ情況ニ依リ戸長役場或ハ町村会議場ヲ校内ニ設ク
ルトキハ成ルヘク之ヲ階上ニ置キ又其出入口ヲ別ニスヘシ
且ツ教員ノ住家ヲ校舍ノ近傍若クハ校舎内ニ設クルヲ便ナ
リトス

一 校舎ノ広狭ハ児童ノ多寡ニ応シ且ツ成ルヘク将来就学スヘキ
児童ノ数ヲモ算シテ結構スルヲ要ス

但他日増築スヘキ目的アル校舎ハ予メ其計画ヲナスヲ必要
ナリトス

一 敷地ノ広袤十分ナル学校ニ在テハ其校舎ハ平屋ニ構造スルヲ
便ナリトス敷地狹隘ナルトキハ二階ヲ設クルコトアルヘシト
雖トモ幼年ノ児童及女子ノ教場ハ成ルヘク階下ニ設クルヲ要

ス

一 教場（校舎下分テラ学）ニ入ルヘキ児童ノ数ハ凡ソ六十人ヲ最多
数トス而シテ授業並ニ管理上ニ便ナルモノハ三十人内外トス
一 教場ノ平面積ハ一人ノ児童ニ付三尺平方ニ下ラス天井ノ高サ
ハ一丈二下ラサルヲ要ス

但天井ノ高サ本文ノ如クナシ難キトキハ教場内空氣ノ容積
ヲ増サンカ為メ屋根裏ニ階裏ヲ露ハシ別ニ天井ヲ設ケサル
モ妨ケナシ

一 教場ハ長方形ナルモノヲ便ナリトス
但其長サ五間ニ過キサルヲ可トス

一 児童出入口ハ男女ヲ別ニシ且ツ其位置ハ恒風ノ向キヲ避クヘ
シ又入口内ノ両側等適宜ノ所ニ児童ノ履物傘置台ヲ設ケルヲ
要ス

一 教場ノ壁ハ厚クシテ堅實ナルモノヲ用ヒ又牀面ヨリ三尺五寸
許ノ所マテ腰板ヲ附スルヲ可トス且壁色ハ日光ノ射入スル教
場ニハ鼠色等反照ノ少ナキモノヲ用フルヲ要ス

一 教場ハ児童ノ左方ニ窓ヲ設ケ光ヲ採ルヲ便ナリトス而シテ窓
ノ面積ハ教場ノ平面積ノ六分ノ一以上タルヲ要ス又窓ノ位置
ハ採光ノ便ヨリ論スルトキハ北方ハ光量ノ明暗ナクシテ可ナ
リト雖モ室内ヲ快爽ナラシメ温暖ヲ日光ニ籍ルノ便ニ於テハ
東南又ハ南方ニ之ヲ設ケルヲ可ナリトス又都テ日光ノ射入ス
ル窓ニハ教場ノ光量ヲ加減スル為メ適宜其設ヲ為スヲ要ス

但本文ノ如ク窓ヲ児童ノ左方ニ設ケルコト能ハサルノ場合
ニ於テモ児童又ハ教師ノ前面ニ之ヲ設ケスシテ児童ノ右方
ニ設ケルヲ要ス又夏季炎熱ノ土地ニ於テハ窓ヲ児童ノ左右

ニ設ケ主トシテ其左方ヨリ採光スルヲ可トス

一 窓ハ牀面ヲ距ル凡ソ三尺五寸ノ処ヨリ天井下ニ達シ且其位置
ハ教場ノ全面ヲ照シ得ヘキ所ヲ撰ヒ其構造ハ單簡ニシテ開閉
ニ便ナルモノヲ可トス

一 階梯ハ多数ノ児童ヲ容ル、学校ニ於テハ便宜ノ場ニ二ヶ所ヲ
設ケ且昇降シ易キヲ要ス故ニ直行或ハ彎曲ナラス半折シテ喰
違状ニ為シ又欄干ヲ設ケルヲ可トス

一 階梯ノ横幅ハ四尺以上ニシテ基堅幅ハ八寸ニ下ラス各段ノ高
サハ四寸乃至五寸ヲ可トス

一 便所ヲ設ケルニハ管理上便ナル所ニシテ校舎ヲ離レ且北方樹
林アルカ如キ地ヲ撰ヒ又通風ヲ好クシ臭氣ノ鬱滯ヲ防キ又校
舎ヨリ便所迄ノ通路ハ庇アル廊下ヲ設ケルヲ可トス

但西南等ニ方テ便所ヲ設ケルトキハ其近傍ニ常緑樹ヲ栽ヘ
日光ヲ遮リ臭氣ノ飛散ヲ防クヲ要ス

一 便所ハ固ヨリ男女ヲ別ニシ其互ニ相距ルコト遠キヲ可トス又
便所ノ数ハ生徒百人ニ付大約三ヶ以上ヲ設ケルヲ要ス

一 体操場及遊戲場モ亦男女ノ区域ヲ異ニシ且砂等ヲ敷キ平坦ニ
シテ且乾燥ナラシムルヲ要ス

一 遊戲場中夏季日光ノ烈シキ所ニハ落葉樹ヲ植エ且場中或ハ其
近傍ニ危險ノ場所アレハ堅固ナル塙垣ヲ設ケルヲ要ス

一 学校用卓子椅子ノ高低ハ児童身体ノ長短ニ準スヘキモノニテ
椅版ノ高サハ児童ノ脛ノ長サト一樣ニシテ後方ニ傾キタル椅
背アルモノヲ可トス又卓子ノ高サハ椅版ノ上ヨリ児童全身六
分ノ一ノ距離アルヲ良トス

一 講義等ノ如キ卓子ヲ要セサル学科ヲ教フルノ教場ニハ椅子ノ

ミヲ備フルヲ便ナリトス都テ桌子椅子ノ用材ハ堅質ナルモノヲ可トス松材ノ如キハ各地得易クシテ且堅質ナリ

一 墨板ハ石盤石ノ堅牢ニシテ久存ノ便アルニ如クモノナシト雖ト木板等ノ墨板ヲ用フルトキハ時々黒色ヲ塗抹シテ褪色セサルヲ要ス又其位置ハ教師ノ後方ニ在ルヲ便ナリトス

(出典・千葉県教育委員会・千葉県教育百年史編さん委員会編著『千葉県教育百年史 第三卷 史料編(明治)』(復刻版)教育新聞千葉支局、一九七八年、三三九〜三四二頁。)

【史料⑥】小学校建築心得制定のこと

甲第百二号

小学校建築心得別紙ノ通相定候条此旨布達候事

明治十七年八月十一日

島根県令 藤川為親

小学校建築心得

第一条 小学校ノ建築ハ質素ニシテ堅牢ヲ旨トシ苟モ虚飾ニ流レ実用ニ負ク可カラス

第二条 校舍ヲ経始スルニ当リ些少ノ経費ヲ嫌厭シテ之ヲ粗雑ニ付スルトキハ永久ニ耐ユル能ハサルノミナラス年々其修補等ノ為メ多少ノ経費ヲ要シ却テ利ナラサルモノナリ故ニ可及の良好ノ材料ヲ用_非完全ナル構造ヲ為スヘシ

第三条 校舍ヲ経始スルニハ光線ノ適度空気ノ流通温度ノ適量等ニ注意セサル可ラス

第四条 校舍ヲ建築セント欲セハ先ツ敷地ヲ撰択セサルヘカラス其概要左ノ如シ

第一項 校舍建築ノ場所ハ人口ノ疎密道路ノ方向山川ノ位置等ヲ斟酌シ該町村ノ中央部ニシテ生徒通学ニ至便ノ者タル可シ

第二項 学校敷地ハ可成広大正角開豁平坦高燥ニシテ善ク大氣ヲ通シ日光ヲ受ケ尚景色ニ富メル者タル可シ

第三項 敷地ノ方位ハ氣候及衛生上ニ注意シテ定ムヘシ故ニ大概東南若クハ南方ニ面シ北方ニハ樹林又ハ山岳等アルヲ最良トシ北面スルヲ不可ナリトス

第四項 敷地ノ広袤ハ学齡兒童ノ員数ニ応シテ之ヲ設備スヘシ例之ハ学齡兒童百人アル町村ニ於テハ少クモ二百五十坪以上タルヘク以上百人毎二百坪ヲ増シ百人未滿ナルモノハ一人ニ付少クモ三坪以上タルヘシ若シ僅カニ四五十人ノ学齡兒童ト雖トモ百五十坪ヲ下ル可ラス

第五項 建坪地形ハ可成の高キヲ要ス地面ヲ距ルコト二尺ヨリ卑フス可ラス

第六項 左ニ記スル土地ハ可成校地ニ用フルヲ避ク可シ
一 水車及諸器械製造場等ニ近接スル地所

二 道路ニ接壤スル地所

三 路辺ノ丘上

四 牧場及墓地ニ近接セル地所

第七項 左ニ記スル土地ハ校地ニ用フ可カラス

一 幽暗ノ小径及卑湿ノ地所

二 道路ノ分岐スル狹隘ノ地角

三 岩石多ク風雨ヲ覆フ能ハサル地所

四 日光ヲ受クル充分ナラサル地所

五 熱鬧ナル市街

六 生徒ノ考慮ヲ攪擾シ心思ヲ蕩揺スル演劇場等ニ近接スル地所

七 近傍ニ汚濁ノ池沼溝湖等アル地所

第五條 校舎ハ左ノ項々ニ從ヒ教場女子ノ爲メニハ殊ニ故禮節等ヲ要ス教員詰所生徒扣所体操場湯吞所及便所等ヲ設備スヘク又応接所食堂書器室等ヲ加フルヲ要ス

但土地ノ情況ニ依リ戸長役場若クハ学務委員事務扱所若クハ町村会議場ヲ校舎内ニ設クルトキハ可成之ヲ階上ニ置キ又其出入口ヲ別ニスヘシ且教員ノ寄宿所ヲ校舎ノ近傍若クハ校舎内ニ設ケ兼テ爨炊場等ヲ具備スルヲ便ナリトス

第一項 教場ハ長方形ヲ最良トス其広狭ハ生徒ノ多寡ニ依ルト雖トモ各級ニ一教場ヲ附与スル場合ニ於テハ幅三間半長四間ノ教場トナシ其中二三十六名乃至四十二人ヲ容ル、ヲ適當トスヘシ

但少数ノ教員ニシテ多数ノ生徒ヲ教授スヘキ学校ニ於テハ其教場狭少ナランヨリ寧ロ広大ナルヲ便利トス

第二項 教場ハ壁ヲ以テ区劃シ隣室ノ咿唔ヲ遮断スルヲ要ス然レトモ試験等ノトキ教場ヲ開通スルヲ要スルコトアルカ為メ予メ板戸ヲ以テ二三ノ教場ヲ区劃シ置クヘシ

但生徒四十人以下ノ村落学校ハ每教場ヲ区劃セサルモ妨ケナシ

第三項 數教場ヲ設クル学校ハ教場外ニ幅四尺以上ノ縁側ヲ

附シ生徒ヲシテ教場内ヲ通過セシムヘカラス

第四項 教場内ニ高一尺五寸ノ高座ヲ設ケ教員ノ授業ニ便ナラシムルヲ要ス尤モ數級ヲ合同シテ授業スル教場ニテハ隨意ニ移転シ得ヘキ台ヲ設クルモ妨ケナシ

但高座ハ二壇ニナシ該教場ト同幅ニシテ堅ハ六尺タルヘシ

第五項 教員詰所ノ位置ハ生徒監督ニ便ナル所ヲ撰定スヘシ

第六項 生徒扣所ハ可成男女ヲ區別シ其広サ教場ノ面積三分ノ一ヨリ狭カラサルヲ要ス

第七項 生徒扣所ニハ帽子外套行廚等ヲ納ル、戸棚ヲ設ケ特ニ食堂ノ構造ナキ学校ハ生徒食事ノ為メニ其四方ノ壁間ニ横木ヲ施シ之ニ幅広キ板ノ一辺ヲ螺旋ニテ付置キ平常ハ下方ニ懸垂シ食事ノ時ニ方リ肘木ヲ繰出シテ棚トナシ其上ニテ喫飯セシムヘシ

但生徒扣所ヲ設ケ難キ学校ハ帽掛等ヲ教場外ニ設ケ食棚ハ本文ノ如ク教場ノ四方ニ設クルモ妨ケナシ

第八項 校内ニ設クル体操場ハ最モ堅牢ニシテ牀板ヨリ塵埃ヲ飛散セサラシムヘシ又校外ニ設クルモノハ砂礫ヲ以テ平坦ニ固メ光線及温度ノ適量ナル場所タルヘシ

第九項 湯吞所ハ教員詰所及生徒扣所ニ近接セル所ヲ便ナリトス

第十項 裁縫所ハ可成広大ニシテ厚薄ノ疊或ハ上敷ノ類ヲ布キ座ニテ授業スルヲ良シトス如此設備スルトキハ諸礼式等演習ノ場トナルノ便アリトス

第十一項 便所ハ管理上便ナル所ニシテ校舎ヲ離レ北方樹林

アルカ如キ地ヲ選ミ通風ヲ好クシ臭氣ノ鬱滯ヲ防クヘシ又校舎ヨリ便所マテノ通路ハ庇アル廊下ヲ設クルヲ必要トス

但北方ニ樹林ナキカ又ハ障礙アリテ西南等ニ方テ便所ヲ設クルトキハ其近傍ニ常緑樹ヲ栽エ日光ヲ遮リ臭氣ノ飛散ヲ防キ其構造ハ木板ヲ用_井ス聖壁ヲ用_井テ清潔ナラシメ

且其灑掃ニ便シテ汚穢分ノ土中ニ滲竄スルヲ防クヘシ第十二項 便所ハ必ラス男女ヲ區別シ其互ニ相距ルコト遠キヲ可トス又其割合ハ生徒百人ニ付大約三箇以上ヲ設クヘシ

第六条 校舎ノ広狭ハ町村内学齡兒童ノ多寡ニ応シテ構造スヘシ例之ハ学齡兒童百人アル町村ニ於テハ少クモ八十人以上ノ生徒ヲ容ルヘキモノヲ構造スルノ割合ニ準スヘシ

但当初資金ニ乏シキ等ノ為メ其構造本条ニ準シ難キ場合ニ於テハ他日之レカ増築スルノ目的ヲ以テ其計画ヲ為スヘシ

第七条 校舎建築ノ種別ハ木造石造煉化造及ヒ平屋ニ階造等ニシテ其形ハ一字形丁字形十字形回字形凸字形凹字形等ナリ然レトモ一字形工字形回字形平屋ヲ最良トス

但土地狹隘ナルトキハ二階又ハ三階ニスルモ妨ケナシ

第八条 校舎ノ方位ハ地形ト恒風ノ都合ニ依ルヘシト雖トモ東南若クハ南方ニ面スルヲ最良トシ北面ニ構フルヲ不可ナリトス

第九条 校舎ノ天井及牀版ハ可成高キヲ要ス殊ニ教場ノ天井ハ床面ヲ距ル一丈以上トシ牀版ハ地形ヲ距ル一尺五寸以上トス若シ暴風大雪ノ虞アル地方ハ其天井一丈ヨリ卑フスルヲ得ト雖トモ八尺ヨリ下ルヘカラス

但天井ノ高サ本文ニ拠リ難キトキハ教場内空氣ノ容積ヲ増

サンカ為メ屋根裏若クハ二階裏ヲ露ハシ別ニ天井ヲ設ケサルモ妨ケナシ

第十条 校舎ハ風雨沍寒ノ害ヲ防禦センカ為メ其屋根ヲ瓦葺ニシ其周辺ノ外ハ聖壁ヲ塗り若クハ牢板ニテ囲ヒ其窓ハ可成玻璃ヲ用ユルヲ最良トス

第十一条 校舎ノ内部ニ聖壁ヲ用フレハ光線ヲ反射シテ室内ヲ明ニスルノ益アリ然レトモ南窓アル教場ハ其反射度ニ過クルノ恐アルヲ以テ南一方ハ薄鶯色ノ壁ヲ用ユルカ若クハ其窓裏ニ淡青色等ノ帳幃ヲ備ヒ常ニ光線ヲ加減スルヲ要ス

但教場ノ壁ハ厚クシテ堅質ナルモノヲ用ヒ牀面ヨリ凡三尺ノ所マテ腰板ヲ附スヘシ

第十二条 校舎ノ窓ハ可成大且堅固ニシテ光明ニ充分ニシ新氣ノ流通ニ便スヘシ故ニ牀面ヲ距ル凡三尺五寸ノ所ヨリ高三尺以上トシ右端若クハ左端三尺ヲ省キ悉ク之ヲ開設スヘシ其構造洋風ヲ擬スルトキハ牀面ヲ距ル三尺ノ所ヨリ高サ五尺乃至六尺幅三尺乃至五尺トシ其開閉ヲ便ナラシメンカ為メ滑車ヲ具エ且其位置ハ教場ノ全面ヲ照ラシ得ヘキ所ヲ撰ミ左右各三個ヲ設ケ前後ニハ設クヘカラス

但左右ニ窓ヲ開クコト能ハサルトキハ可成生徒ノ左方ヨリ光線ヲ射入シ又ハ天窓ヲ穿ツヘシ

第十三条 生徒昇降口ハ可成男女ヲ區別シ其位置ハ恒風ノ向キヲ避ケ専ラ出入ニ便ナルカ為メニ設クヘシ又出入口ノ兩側等適宜ノ場所ニ履物傘置場ヲ備ヘ置クヘシ

第十四条 二階又ハ三階ニ構造セル校舎ハ便宜ノ場所ニ階梯ヲ設ケ且昇降シ易キカ為メ直行若クハ彎曲ナラス半折シテ喰違

状ニ為シ又欄干ヲ設ケ階裏ニ板ヲ附スヘシ

但階梯ハ縁側ニ設クルヲ可トス決シテ之ヲ教場内ニ設クヘカラス

第十五条 階梯ノ横幅ハ四尺以上ニシテ其堅幅ハ八寸ニ下ラス各段ノ高サハ四寸乃至五寸タルヘシ

第十六条 土地ノ情況ニ由リ牀下ニ池^{イヅナ}窖ヲ設ケ牀版ヲ乾カシ薪炭ヲ貯ヘ「ストーフ」又ハ火烧所等ヲ置クニ便ナラシムルヲ要ス

第十七条 学校敷地ノ周辺ニハ牆塼若クハ柵ヲ設ケ其構内ヲ遊園トナシ生徒ヲシテ猥リニ是ヨリ外ニ出テサラシムヘシ

第十八条 遊園ハ生徒ノ心神ヲシテ快爽ナラシムル所ナレハ乾燥広濶ナルヲ最良トス故ニ砂礫等ヲ布キテ充分平坦ニ固メ其周辺ニ種々ノ草木ヲ植ウヘシ

但男女ヲ区別スルヲ要ス

第十九条 稍資金ニ給足スル学校ニ於テハ其地所内ニ丘陵谿谷森林草庭ヲ設ケ諸方ニ屈曲旋転スル歩場ヲ通シ涼亭休憩所ヲ構ヘ小流ヲ導キ魚ヲ養ヒ漬水ヲ穿チ且古今忠臣義士列婦貞女ノ像ヲ設ケ児童ニ徳ト學トヲ感覺セシムルカ如キハ最モ資益アルモノトス

第二十条 遊園中夏季日光ノ烈シキ所ニハ落葉樹ヲ植エ且園ノ内外ニ巖骨樹根若クハ池沼溝渠等生徒ノ往來若クハ遊歩ニ危害ノモノアレハ適宜ノ方法ヲ設ケ之ヲ防セカサルヘカラス

附録

校舎構造諸形

教育令期における小学校建築基準の形成

〔図は省略〕

各級ニ一教場ヲ附与スル場合ニ於テハ幅三間半長四間ノ教場ト為シ其中ニ四十二人ヲ容ル、ヲ適當トス其内外ノ模様ヲ示ス左ノ如シ

〔図は省略〕

敷地坪数五百坪

工字形長方地平屋

建坪八十二坪

生徒百二十六人ヲ入ル可シ

〔図は省略〕

〔出典…島根県教育庁総務課・島根県近代教育史編さん事務局編『島根県近代教育史 第三卷 資料』島根県教育委員会、一九七八年、六五六―六六一頁。〕

【史料⑦】 小学校建築心得を定めること

乙第四十一号

郡役所

戸長役場

学校屋舎建築ノ儀ハ生徒ノ管理授業ノ便否ニ関スル尠ラサルヲ以テ左ニ学校建築ノ概略ヲ示シ候条将来新ニ小学校ヲ建築致候時ハ深ク注意計画可致学務委員ヘモ可相達此旨相達候事

明治十八年三月四日

佐賀県令 鎌田景弼

小学校建築心得

一、小学校ノ敷地ハ学区内生徒ノ通学ニ便ニシテ大氣ノ流通好ク且ツ日光ヲ充分ニ受ル処ニシテ喧雜危険ノ場所及ヒ卑湿不潔ノ地ヲ避ルヲ要ス

一、校舎ハ教場（女子ノ為メニ特殊ニ設備スルヲ要ス）（前記ノ教場ヲ設ルヲ要ス）教員詰所湯吞所ヲ具フヘク又講堂食堂等ヲ設ルハ最モ便ナリトス而シテ其構造ハ素質ニシテ堅牢ナルヲ要ス

但戸長役場又ハ町村会議場ヲ校舎内ニ設ルトキハ成ルヘク之ヲ階上ニ置キ又其出入口ヲ別ニスヘシ

一、校舎ハ敷地ノ広袤充分ナル学校ニ在テハ平屋ニ構造スルヲ便ナリトス敷地狹隘ナルトキハ二階ヲ設ルコトアルヘシト雖トモ幼年ノ児童及ヒ女子ノ教場ハ成ルヘク階下ニ設ルヲ可トス

一、教場（教員分テテル学
校以下同シ）ニ入ルヘキ児童ノ数ハ凡ソ六十人ヲ最多數トス而テ授業並管理上ニ便ナルモノハ三十人内外トス

一、教場ノ平面ハ一人ノ児童ニ付三尺平方ニ下ラス天井ノ高さハ一丈二下ラサルヲ要ス

但天井ノ高さ本文ノ如ク為シ難キトキハ空氣ノ容積ヲ増サンカ為メ別ニ天井ヲ設ケス屋根裏ニ階裏ヲ露ハスモ可ナリ

一、教場ハ長方形ナルモノヲ便ナリトス然レトモ其長サ五間ニ過キサルヲ可トス

一、児童ノ出入口ハ男女ヲ別ニシ且其位置ハ恒風ノ向キヲ避クヘシ

一、教場ノ壁ハ牀面ヨリ三尺五寸許ノ所マテ腰板ヲ附シ且壁色ハ日光ノ射入スル教場ニハ鼠色等反照ノ少キモノヲ要スヘシ

一、教場ノ窓ハ児童ノ左方ニ採リ其面積ハ教場ノ平面積ノ六分一以上タルヲ要ス又窓ノ位置ハ東南ニ設ケ日光ノ温暖ヲ資リ室内ヲ爽快ナラシムルヲ要ス亦日光ノ射入スル窓ニハ教場ノ光量ヲ加減スル為メ適宜其設ヲ為スヘシ

但本文ノ如ク窓ヲ児童ノ左傍ニ設クルコト能ハサルノ場合ニ於テモ児童又ハ教師ノ前面ニ設ケスシテ児童ノ右方ニ設ルヲ要ス

一、階梯ハ半折シテ喰違狀ニ為シ欄干ヲ設クルヲ可トス亦其各段ノ高さハ四寸乃至五寸タルヘシ

一、便所ハ校舎ヲ離レ樹木アル北方ノ地ヲ撰ミ通風ヲ好クシ臭氣ノ鬱滞ヲ防クヘシ

但西南等ニ便所ヲ設クルトキハ其傍ニ常緑樹ヲ栽ヘ日光ヲ遮リ臭氣ノ發散ヲ防クヘシ

一、体操場及ヒ遊戲場ハ男女ヲ別ニシ且ツ砂等ヲ敷キ平坦ニシテ乾燥ナラシメ而シテ夏季日光ノ烈シキ所ハ落葉樹ヲ植ヘシ

（出典…佐賀県教育史編さん委員会編『佐賀県教育史 第二卷 資料編（二）』佐賀県教育委員会、一九九〇年、二六四～二六五頁。）